

けはらはいじせいほうちく
毛原廃寺西方地区 範囲確認調査
発掘調査成果報告

山添村

奈良県立橿原考古学研究所

令和3年7月6日

-
- | | |
|------------|---|
| 1. 調査地 | 山辺郡山添村毛原 |
| 2. 遺跡名（番号） | 毛原廃寺（102-0012） |
| 3. 事業名 | 毛原廃寺西方地区範囲確認調査事業 |
| 4. 事業者名 | 山添村 |
| 5. 調査期間 | 令和3年5月14日～7月下旬（予定） |
| 6. 調査担当 | 奈良県立橿原考古学研究所
調査部 調査課 課長 鈴木 裕明
調査第一係長 大西 貴夫
主任研究員 岡田 雅彦（現場担当） |
| 7. 事業面積 | 543 m ² |
| 8. 調査面積 | 93.2 m ² |
| 9. 主な遺構 | 礎石、礎石抜き取り穴、礎石建物基壇、壁地覆根石列など |
| 10. 主な遺物 | 土器、瓦、木製品（コンテナ130箱） |
| 11. 要旨 | 今回の調査で西方地区礎石建物の東西規模が確定した。また、壁地覆根石列を検出できたことから、創建当時の基壇上面が削平されておらず遺存している可能性が高いことがわかった。 |

はじめに

毛原廃寺^{けはらいはいじ}は、奈良時代前半に建立された寺院である。毛原廃寺に関する史料は一切残されておらず、当時どのように呼ばれていたか明らかになっていないため、字名を用いて毛原廃寺と呼ばれている。

毛原廃寺には、現在も南門・中門・金堂^{こんどう}の礎石^{そせき}が残されている。当時の都からも東へ遠く離れた山中に存在するにも関わらず、現地に残されている礎石は平城京内の著名な大寺院と同レベルの加工技術が用いられていること、大寺院と同規模の建物が存在することなどから、大正 15 年に国指定史跡となっている。

今回発掘調査をおこなった西方^{せいほう}地区は、金堂などの寺院の中心部から深い谷を挟んで北西に位置している。大正 7 年の毛原廃寺についての調査報告には、この地区に礎石の存在が指摘されているが、大正 15 年の史跡指定の際には含まれなかった。

昭和 13 年に黒田昇義^{くろだのりよし}氏によって調査がおこなわれ、西方地区に礎石建物が存在することが知られるようになった。黒田氏の報告によると、その当時礎石は二か所で確認できたが、一か所は動いており、もう一か所は原位置を保っていたとされている。この調査成果から黒田氏は、東西五間・南北四間の建物を復元したが、緊急性の高い調査であったため、建物規模や位置などを厳密に特定することはできていなかった。

その後、西方地区南の県道拡幅に伴う発掘調査が平成 28・30 年度におこなわれ、礎石抜き取り穴が検出された。これにより、黒田氏が調査した建物位置を特定することができた。しかし、建物の東・南・西が 12 世紀に削平を受けていたことで、当初の基壇^{きだん}の状況と東西規模について確定させることができず、今後の課題となっていた。

したがって、今回の調査は、西方地区で検出された建物の規模・基壇外装などを明らかにすることを目的とした。

調査内容

既往の調査成果から復元された礎石位置に 4 つの調査区を設定した。調査の結果、各調査区で想定していた通りの位置で礎石抜き取り穴（SK101～108）を検出した。また、4tr では抜き取られず現地に残された礎石 1 個を確認している。確認した礎石の規模は、横 117 cm・縦 104 cm・厚さ 32 cm、柱座^{はしらざ}及び地覆座^{じふくざ}高は 4.0～4.5 cm である。黒田氏の報告では原位置を保っていたとされていたが、礎石上面と基壇上面がほぼ同じ高さであることから後世に下へ落とし込まれたものと考えられる。ただし、下に落とし込まれてはいるが、その位置はほとんど動いていない。既往の調査で想定された位置で礎石と礎石抜き取り穴を検出したことから、建物規模は、東西 5 間（約 16.2m）、南北 4 間（約 10.8m）からの変更はない。

4tr 以外で礎石は抜き取られていたが、一部の礎石抜き取り穴には壁地覆根石列^{かべじふくねいしれつ}が残されていた。壁地覆根石列とは、建物の壁を上のにのせる地覆とよばれる建築部材の土台となるものである。礎石と礎石をつなぐように基壇に幅 60 cm 程の溝を掘り、上面が平らな石を据え付け、その上に細長く割った平瓦を 3 枚ほど重ねていた。検出した壁地覆根石列の内、SK101・103・104・106・108 の間では東西方向、SK106 と SK107 の間と SK103 の南側では南北方向となる。

基壇の東端は、南側の調査と同様に 12 世紀に削平を受けていたが、1tr と 3tr では基壇の北端と西端を確認することができた。これにより基壇は東西約 18.6m、南北 13.2m（現存基壇規

模は東西 16.7m、南北 11.5m）と推定される。また、検出した基壇高は、北端で 0.3m、西端で 0.2mと低い。基壇外装は後世に抜き取られたと考えられ、残されていなかった。抜き取り痕跡の可能性がある幅 0.6m程の溝状の遺構底が平らでないことから、石積みであった可能性もある。

1tr 基壇北端より北側では、廃絶した際に廃棄された瓦が大量に出土した。基壇際で軒瓦^{のきがわら}が集中して出土していることから、これらの大量の瓦は屋根からずり落ちたものであることがわかる。また瓦と一緒に木材も出土しており、その一部は加工されていることから、建物に使用された建築部材となる可能性がある。これらについては取り上げており、今後分析を進めていく予定である。

1 tr 基壇北側では、横 2.0m以上、縦 1.8m、深さ 0.7mの土坑（SK109）を確認した。SK109は、層位から西方地区の礎石建物建立以前に掘削され、礎石建物が機能していた際には埋まっていたと考えられる。

まとめ

壁地覆根石列が残されていたこと、基壇西端と北端を確認できたこと、基壇端で軒瓦が集中して出土したことなどから、建物は東西 5 間（約 16.2m）、南北 4 間（約 10.8m）であることが確定した。また、既往の調査で指摘されているが、正面一間分は唐招提寺金堂のように壁がない吹放しと呼ばれる形態であり、その後ろの空間を壁で囲み、仏堂としていたものと考えられる。

また、壁地覆根石列の残りがよいため、その当時の基壇上面が残っていたと考えられる。今まで発掘されてきた他の古代寺院の建物基壇で今回のように基壇上面が残っていた事例は極めて少なく、貴重な事例といえる。

以上のように今回の調査によって、西方地区の礎石建物規模や構造が明らかになったことは、史料に残らない謎の大寺院である毛原廃寺の性格などについて考えていくうえで、極めて重要な成果と言える。

参考文献

- 西崎辰之助 1918「毛原廃寺址」『奈良県史跡勝地調査会報告書』第五回 奈良県
- 黒田昇義 1955「山辺郡豊原村大字毛原 史跡毛原廃寺跡 指定地区外の遺構」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第 5 輯 奈良県教育委員会
- 松田真一・近江俊秀 1991『毛原廃寺の研究-基礎資料の集成と若干の考察-『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第 15 冊 奈良県立橿原考古学研究所』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2020『毛原廃寺-県道上笠間八幡名張線道路改良に伴う発掘調査報告書』奈良県文化財調査報告書 第 184 集
- 山添村教育委員会・奈良大学 2020『毛原廃寺跡 第 2 次発掘調査報告』山添村埋蔵文化財発掘調査報告書 第 3 集

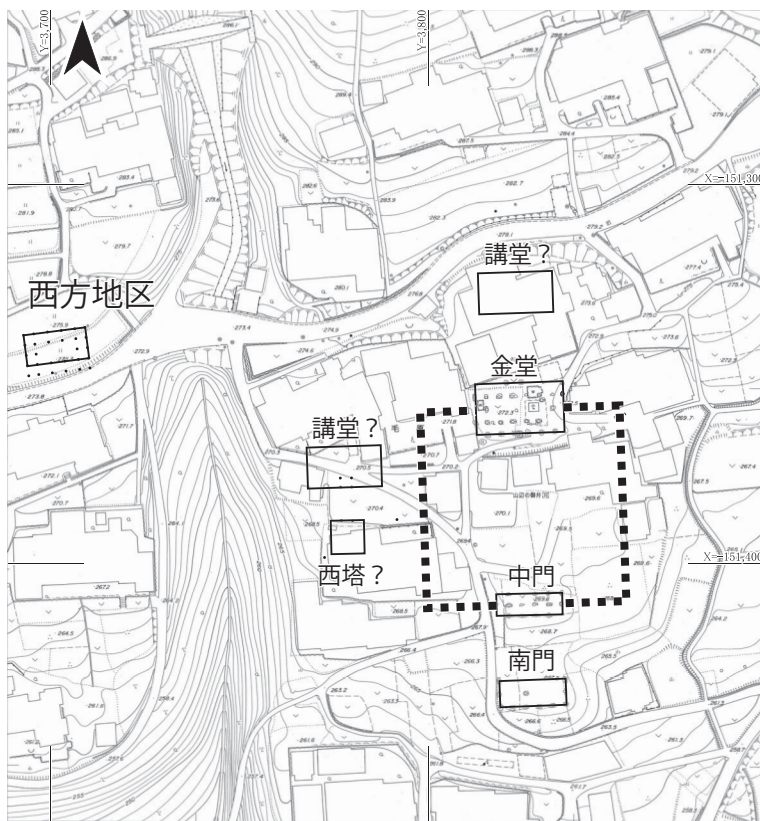


図1 伽藍配置図 (S=1/2,000)

山添村教育委員会・奈良大学 2020『毛原廃寺跡
第2次発掘調査報告』図9を一部加工して転載

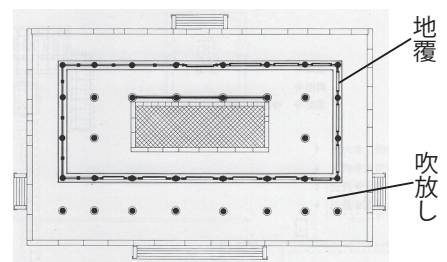


図2 唐招提寺金堂平面図

日本建築学会編 1980『日本建築史図集新版』より転載

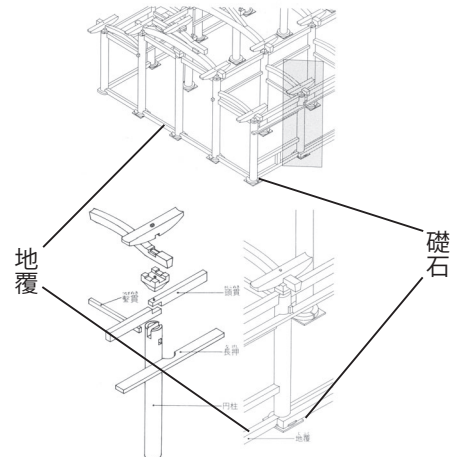


図3 建築部材

西和夫 1990『図解 古建築入門 日本建築はどう造られているか』彰国社より転載

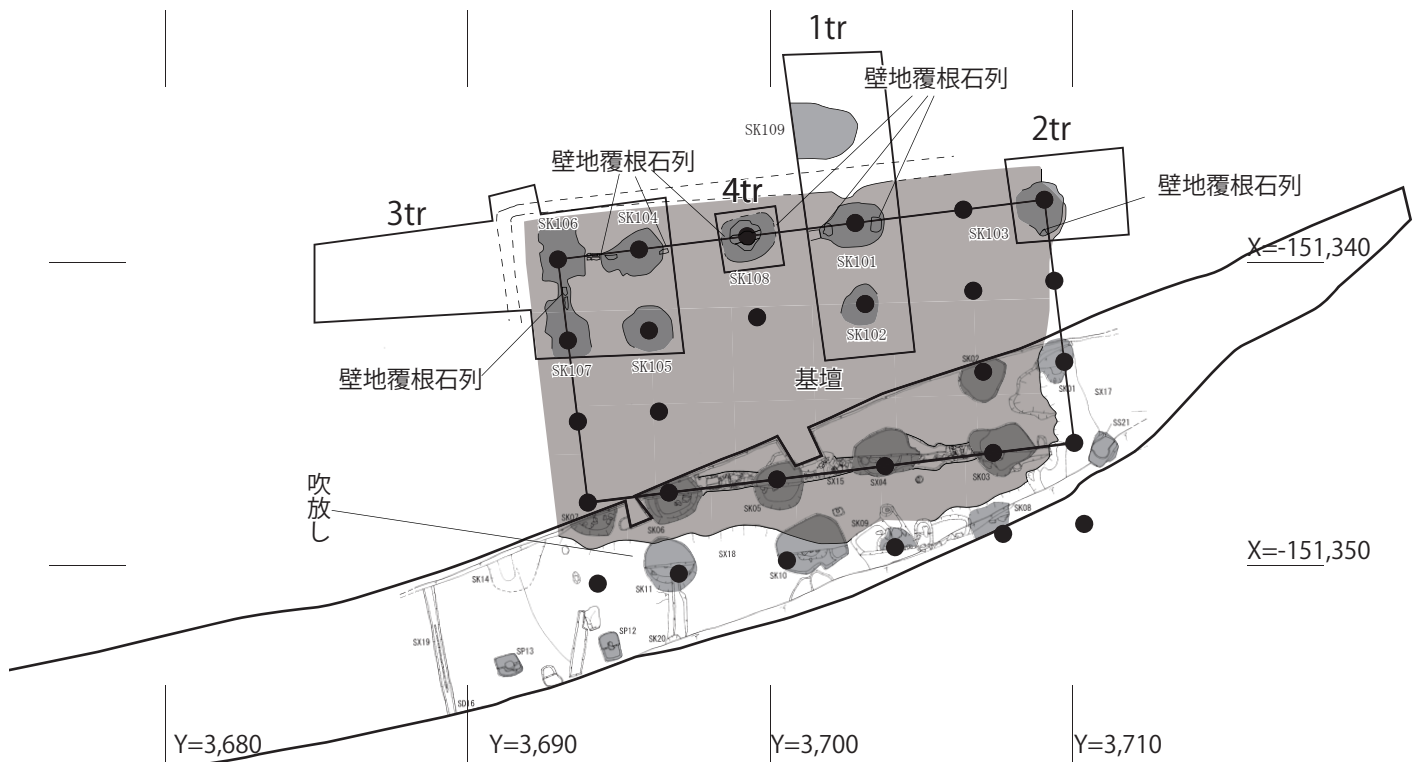


図4 平面図 (S=1/250)



調査区全景写真(上が北)



1tr 基壇北側面堆積(北東から)



1tr 基壇北端 (北から)



3tr 壁地覆根石列(東から)



4tr 礎石 (南から)